

時に市民の側に立った編集に努力が払われていると思う。前回白書の主テーマであった「横浜と私」を受けて、今回の主テーマは「私の横浜」であり——ここにいう私が、横浜の市民なのであろう。私という事を前面に打ち出すことにより、市民に対する呼びかけと働きかけを感じる。

市民がどのような生活感情をもっているか、市民の手による生活作文「私の横浜」の中に、或いは実態調査・意識調査のアンケートと分析「横浜の私たち」の中に読みとることができる。また広範な行政の実情を「横浜の10年」の中に図表による時系列の移り変りをとおしてその輪郭を知ることができる。限られた紙面の中で、わかり易くまとめられており、多くの市民が読まれたらよいと思う。

然し、白書を読むのは、自分の置かれている環境についての単なるもの知りや、他人は何を考へ何をしているのかの動向を知ることによって、同感したり共鳴したりして終るものではないと思う。読むことによって問題点を整理し、明日への運動の方向性を得ることが望まれる。

市民にはいろいろな生活感情と要求とがあることが判る。これを行政がどのように汲み上げ、どのように組み立て、どのように実現してゆくか「運動の方向性」のモデルを具体的に表わして欲しかった。そうすることによって、より多くの市民「発言層はもとより、沈黙層」に対して呼びかけ働きかけることができるものと思う。

市民生活白書を通して、住民と市民との関係について考えてみた。そこに住んでいる人達が住民である—それは判る。また行政区画である市に住んでいる住民を市民「市の住民」というのも判る。然し住民と市民とを区別する本質はそうではあるまい。市民とは権利と要求に目覚めた一人一人が横に連帯し討論と同意のうゑに自分達の環境を含めた諸問題を解決し合ってゆこうとする市の住民で

ある。したがって市民は単なる住民ではなく自主的に自己統治〈自治〉に目覚めた住民のことである。

とすると住民のうち市民はどの程度いるのであろうかと思ったりする。市民生活白書もあるいは住民生活白書であるのかも知れない。

現状を政治—行政—住民・市民の線で把えるとき政治や行政に対する不信感は強い。政治に見放され、政治を見放した住民がまことに多い。この現状の中で、行政が住民の側に立っていろいろな要求を、話し合いの輪を拡げつつ、どのように行政に反映し、どのように政治を動かしていくのか、その運動の過程が即住民から市民への変革の道であり、その出発点は住民の諸要求であると思う。さまざまな要求をかかげた住民運動〈白書・表—25〉をどう扱い、どうリードしてゆくかが、地方自治の行政の基本的課題であるように思う。

住民集会・市民集会、住民との対話・市民との対話、住民参加・市民参加、住民運動・市民運動…等いろいろの概念がある。これらはいづれも理念と具体的な要求をもって現れる。これらを実現する過程は、計画10年、実施10年といった気の長いものであり、従来の日本的せっかちさを先ず克服してゆかなければならないと思う。

〈計画局港北ニュータウン建設部建設課長 田代善雄〉

「私の横浜」がない

第1部を読了。あら、シラケている人なんて1人もいやしない。横浜に限りない愛着を抱いていて、身の囲りのちよつとした事に素直に反応して地域には積極的に楽しげに尽そうとする人達ばかり。ホットでお人好しで充実している。私とは住んでいる世界が違うのかしら。それとも……？

編集者の危惧と配慮が、〈横浜の人たち〉のグラ

フにこもっていました。

第2部を読みつつ脱帽。第1部で意図した問題提起は決して十分でなく、しかも必ずしも豊富だとはいい難い資料を活用して、多方面から解剖してみせた市民生活の現状分析は、階層性への意識も行き届いていて、苦勞と努力の跡がうかがわれます。しかし……。

第3部は有能なハンドブック。これを読めば横浜市政について何でも語れます。何か必要な資料を捜したい時はとても役立ちそうだし、それに今度社会科の宿題で職場を訪れる小学生に、ぜひこのグラフを見せてあげよう。

さて、「市民参加による市民生活白書とはこうしたもの」といってしまえば終りである。市民生活を市政の現状分析としては立派に目的を果しているのだから。だが広報としての市民生活白書を、市民と市政を仲介する市民参加の有力な手段と考えると、問題がある。それは一つには3部構成の関連にあるようだ。こうした表現方法は、現象的なものが順次深まっていく過程で始めて興味深くなる。同一資料が各所に出てくるにもかかわらず、第3部で見せられる結果と、市民生活の実際とが果してどうかかわっているのか良く分らない。一見して分かりやすい資料をという配慮がかえって全体の統一を欠いたのか、それとも市民参加の白書であることを強調したための、市政描写の慎しみ深さ故か。

二つには「市民参加」そのものの把握の仕方の問題があるのではないだろうか。行政の側から口に出せる真の市民参加とは、行政自身がそれを受けて立てるのかという厳しい自己批判に支えられたものではなければならないと信じる。組織や機構の問題としてたやすく扱うことを自戒しようと思う。

「情報の公開は市民参加の前提」であることは確かだが行政の側の不断の努力と誠意とに基づいた

自信がない限り、真の情報の公開など決してあり得ないことを知って欲しい。行政の一部である広報は、だから自治体の具体的な模索の姿を、もっと積極的に赤裸々に描いて欲しかった。

教育人口の推移や学校数の増大や教育費の伸びをグラフで見る時、その重圧に押潰されそうになるが、善意に満ちた作文を読むと、少しは勇気が湧いてくる。しかし、市民と行政とのつながりを追っていくと、いらだたしいばかりである。

様々な問題と市民との中間にあって、「涙しつつ」行政を行なわなければならない生身の過程がそこには描かれていない。

〈教育委員会事務局施設部学校計画課 舟田鶏津子〉

私自身の痛みとしての『白書』

『私の横浜』には、新鮮な近親感がある。白書と名がつくものには、専門書としての特異な構えがあって、私には近づき難いものが多いからである。この新しい白書は、そんな固さがなく、身近な気安さで読めるためか、うれしいことである。「私の横浜」とあるように、白書づくりへの積極的な市民参加を試みられたことは、意義あることと思う。多様多層の市民生活観が、行政運営のむずかしさと同時に、人肌の温かさを感じさせてくれる。いわゆる弱者救済の行政も、この視点から考え直されるべき時代にきているのではないだろうか。私は、毎日市民に接する職員として、住民の自治や参加に関心をもって読んだ。今日まで横浜が、革新自治体としての市民参加を、大きく推進したことは高く評価されている。また、さらに今後の発展成長には、多くの注目がなされているのである。

この意味合いから白書の読後に、私は、参加問題と白書のかかわりを考えさせられた。3部編成を